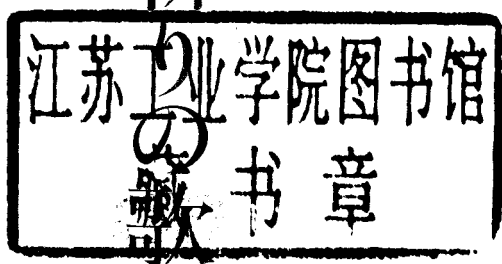


メツタ斬りの歌

佐藤愛子

メ
ツ
タ
斬



佐
藤
愛
子

メツタ斬りの歌

一九八九年九月二五日 第一刷発行
一九八九年一〇月三〇日 第二刷発行

著者 佐藤愛子

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一―一五〇

出版部 (〇三) 二三〇―六一〇〇
販売部 (〇三) 二三〇―六三九三
製作課 (〇三) 二三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁の本が万が一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 AIKO SATO

Printed in Japan ISBN4-08-772709-2 C0093

メッタ斬りの歌 目次

ババタリアンの旗色 7

因果な性 24

誕生日にコロツケ!? 40

女の進歩はどうなった 58

そんな男がほしいのか 73

惻口で美人で素直で…… 89

幸せになる権利
106

ハンサム登場
122

不倫時代
140

胸に沸くメタンガス
155

赤福餅の怨み
171

日本はどうなるか！
188

装丁
本文挿絵 ■ 灘本唯人

メ
ッ
タ
斬
り
の
歌

ババタリアンの旗色

「ああ、もう、メッタ斬りに、斬って斬って斬りまくりたいわねえ」というのが、この頃の米山光代さんの口癖である。

「“みな殺しの歌” っていう映画があつたけど、わたしは“メッタ斬りの歌” っていう歌を作りたいわ！」

そこでこの小説の題名を「メッタ斬りの歌」とした。

主人公は米山光代——彼女である。当年とって六十一歳、夫も子も孫もある中流主婦の彼女が、なぜメッタ斬りの歌を歌いたくなったか、それを彼女に代って、これから筆者が書くのである。

「斬って斬って斬りまくれ

あいつもこいつも斬りまくれ」

これが彼女が作った「メッタ斬りの歌」の冒頭である。全部はまだ出来ていない。光代さんの中では、出だしと終りだけが出来ている。終りは、

「バンザイ バンザイ

ああ、胸がスツとした」

という歌詞だ。その中間がまだ出来ていない。

「誰か、わたしと同じ気持の人が中を作ってくれないかしらねえ……」

冗談めかしてはいるが、時々光代さんは本気でそういう。その歌は、曲さえよければ、はやるにちがいないわ、と思っている。あいつもこいつもメッタ斬りしたいと思っている六十代、七十代はきつと沢山いるにちがいないのである。

いるけれども今は皆、地にもぐっている。固く口を噤んで、諦めている。あるいは耐えている。

大分前だが、光代さんは「見ざる聞かざるいわざる」という歌を作ろうとしたことがあった。「見ざる聞かざるいわざる」は、いうならば年寄りたちの諦め——いや修養の歌だ。

かつては修養の歌を作ろうと考えていた光代さんは、思うところあってこの頃「メッタ斬りの歌」に変えたのだ。

「奥さんはいつもお元気があってよろしいわねえ、ホホホ」

そんな光代さんをお向いの間崎さんはそういう。

「わたしなんか、奥さんから見たら、七つも年下なのに、とてももう、そんな元気はありませんわ、ホホホ」

間崎さんは何かというとホホホ、ホホホと笑う人だが、もしかしたらそうして笑うことによって、辛いことや世の中の不条理をやり過ぎてきたのかもしれない。

間崎さんは京都の和装小間物店の二人娘の姉の方で、婿養子に迎えることに決っていた番頭を嫌って、新聞記者だった間崎氏と駈落ち同然に一緒になった。間崎氏は京都の商家の封建性を批判し、その保守性の中に唯々諾々と埋没させられてきた女性の生きざまの、「自覚せざる悲劇性」について弁じ立てたりする人だったので、間崎さんはむつかしいことはわからぬままに、この人なら女に理解のある人だと思って家を捨てたのだった。今、実家は妹がその番頭と結婚し、京都の名店のひとつに数えられるまでになっている。

「わたし、番頭と一緒になった方がよかったと、今になって後悔してますのよ、オホホ」

と間崎さんはいう。

「この前、法事で京都へ行ったら、あの番頭の倉原がそれは立派になってますのよ。貫禄もあって、太っ腹で、愛嬌があつて、よく気がついて優しいし……それに較べたらうちの主人の貧相なことといったら……。傲慢で、威張り屋で、お行儀は悪いし……」

間崎氏は年と共に専制君主のようになり、封建時代を地でいくといった家庭生活。新聞記者を停年でやめた後は、社会評論家として活躍をしている。「男女同権、女性の理解者」の仮面の下にあるのは旧弊なエゴイストの顔である。

「わたし、死ぬ時に間崎の正体を世間に暴露してやろうかと思うこと、何べんもあります。オホホホ」

その春風のような笑い声は、いっそなごやかな分だけ不気味なのである。

ところで、米山光代さんの近所の評判はあまりよくない。

「決して悪い人じゃないんですけどねエ……」

近所の人は寄るとそっくり合う。この「ですけどねエ……」の「ねエ……」と引っぱった抑揚に籠められているものに、読者は気づいていただきたい。

「何もしなければ悪いことはありません。しかしうつかり近づくと危険です」

という立札が、動物園の凶暴ゴリラの檻のまえなどに立っていることがあるが、こ

の、

「ですけどねエ……」

の後には、その立札の文句みたいな気持が籠っているのである。

「おいしそうなお料理ですけどねエ……」

——しかし味の方はあんまりうまくない、とか、

「お綺麗なお嬢さんですけどねエ……」

——アタマからっぽ、とか。

「間崎さんだからこそ、あの方と仲よくしていただけるのかもね」

「出来た方ですものねえ」

と肯き合っている人たちがいる。だがそうして肯いた後、

「でもねえ、あんなふうにもオホホ、オホホと笑っていらっしゃるのを見ると、心の奥にはなにか別のことが潜んでるんじゃないかしら、なんてつい思ってしまうのね」

という人がいたりして、

「あらッ……実はわたくしもそう感じてたの……」

「まあッ！ やっぱり？」

と、さっき、「出来た方ですものねえ」と褒めていた本人が、我が意を得たように目まぜして肯いたりする。

女性の評価能力というものは、このように曖昧モコとしたものであるから信用出来ない。褒められたからといって喜ぶ必要もなく、けなされたからといって、しよげることもないのである。

ところで光代さんは今から二十年ほど前、古家を改築したついでに、三十坪ほどの庭をつぶして二階二間・階下二間の間貸しを目的とした建増しをした。

その頃、光代さんの夫米山孝造氏はまだ四十代後半で元気いっぱい、中どころの食品会社の経理課長をしていて、決して羽ぶりは悪くなかったのだが、光代さんはこう考えた。

——キリギリスと蟻サンの寓話にもあるように、老後の設計を立てるべきだわ！
上り坂の時こそ、人は下り坂の用意をしなければならない。下りかけてからではもう遅い——。

光代さんのことを人は（他人ばかりでなく家族も親類も）うるさいばあさん、ケチ、

頑固、意地悪、中には業つくばり、ときえ酷評する人が少ないが、筆者は「そういうことをいう手合に限ってろくでもない人生を送っている」という光代さんの意見に賛成である。

光代さんは「年をとってから人に心配や迷惑をかけてはならない」とひと筋に思い決めている人で、だからこそ、質素儉約を心がけ、清く正しく真面目に生きようとしている人なのだ。「メッタ斬りの歌」も、光代さんの正義感から出たものなのである。光代さんは、

—— 気くばりを大切に。

—— 人には親切に。

—— 無駄遣いを慎しみ。

—— 折目正しく。

—— 日々の感謝を忘れず。

などの幾つかのモットーを持っている。

「気くばり」や「折目正しく」ということと「メッタ斬りの歌」とは融合しないように見えるのに、光代さんの中ではちゃんと融合している、それが光代さんの個性であるというべきであろう。しかし多かれ少かれ、人はみなそんな矛盾を抱えて生きてい

るもので、

「女性」と呼ばずに「女」と呼ぶのは差別意識から出た言葉だ！」

などと怒っている人が、自分の子供のクラスに血友病の生徒がいるのを知って、

「あの子と遊んではいけない。エイズかもしれないから」

などと平気でいっている。

「だって、危険は防止するべきでしょう？　少くとも血友病患者だったら、エイズにかかっている可能性はあるのですから。うつってしまったてから騒いだってもう遅いんです！」

注意されるとそういつていきまく。その時は自分の差別意識を棚に上げている。またそういう話をテレビや週刊誌で見たり聞いたりした人の中にも、

「ほんとにエゴイストねえ。無智ねえ……エイズなんて、そう簡単にうつるものじゃないのよ」

としたり顔に批判する人がいるが、そのうちたまたま近くの肉屋の息子が血友病で、どうやらエイズに感染したらしい、などという噂を耳にすると、人にはいわず、こっそり黙って遠くの肉屋へ買いに行ったりしている。矛盾を抱えているのは、なにも光代さん一人ではないのである。